



# かせかけ

編集 沖縄県立看護大学  
広報・情報委員会  
発行 平成18年3月31日



2005年看大祭

## 目次

● H16年度 FD (Faculty Development)	● 国際学会発表	7
研修プログラムに参加して	● 大学行事	8
● 教育・研究分野紹介	● サークル活動	10
● 教員紹介(よこがお)	● 教職員の動き	11
● 委員会活動		6

## H16年度 FD (Faculty Development) 研修プログラムに参加して

精神保健看護 助手 伊礼 優

私は、平成17年3月6日から3月21日の期間、上記の目的でハワイ大学マノア校:看護・歯科衛生学部で研修を行う機会を得ることが出来ました。広大な大学の敷地に圧倒されましたが、「伝統のある誇り高い大学」という印象を受けました。

私はハワイ大学の教育プログラムに興味があり、特にシラバスを中心にハワイ大学の教育方法を学ぶ事が研修目的でした。ハワイ大学のシラバスに目を通して感じたことは、内容が詳細に明示されている事であり、その量の多さに驚きました。契約社会の米国文化とも言えますが、単位を取得する為に必要な知識と、それを教授する方法や内容が明確に示されています。それぞれの教科は、シラバスに添って授業が展開されており、それによって教育の方向性が確立されているように思われました。

学生を観察して感じたことは、「主体性」であり、授業への取り組み方や実習での対応を見てみると、専門職を目指して自ら積極的に学ぶ姿勢が伝わってきました。個々の学生が自己の意見をアサーティブに主張し、それぞれがハワイ大学の学生として「誇り」を持っている様子です。

「教育は生徒の持つ可能性のすべてを価値あるものとして実現することができる」とフラン



スの教育学者であるモーリス・ドペスは述べていますが、ハワイ大学の教授法や学生の主体性を見てみると、まさしくその通りであると実感しました。看護や保健の専門職を目指す学生の、可能性を最大限に実現する為の教育を提供することが、「誇り高い大学」として魅力ある大学に成長すると思います。

沖縄県立看護大学は、まだ3期生を送り出した新しい大学ですが、県民の期待も高く、地理的にもグローバルに活躍できる場所に位置しており、本大学の役割は大きいと思われます。これから着実に実績を重ねて「世界に開かれた亜熱帯の大学」「学生が誇りを持てる大学」に発展するように努力する事が、我々教員に求められていると、研修を終えて考えるようになりました。

私にとって、研修は意義あるものでした。若手教員の為に今回の研修を計画して下さいました上田学長をはじめ、国際交流委員会の皆様、総務課の皆様に深く感謝申し上げます。又、今研修の実現の為に多大なご協力を頂いた比嘉良充前教授に深く感謝申し上げます。



小児保健看護 助手 山城 五月

平成17年3月6日～21日まで、ハワイ大学マノア校看護学部でのFD研修に参加した。FD研修の目的は、専門的教育技術を発展させることで、その主な研修内容は、ハワイ大学の教員につき、講義や臨地実習に参加することだった。

講義は、3年生の母性看護の講義と他に4つの講義を聴講することができた(学生のディスカッションに参加することもあった)。その中で、教授法や教材、学生評価、教員評価、効果的な授業を展開するための工夫、講義での学生の反応など、実態を知ることができた。臨地実習は、カピオラニ病院での母性看護実習に参加し、引率教員の学生指導を見学し、時には、私自身の指導方法を求められることもあり、お互いの指導方法を共有することができた。学生と看護ケアに一



緒に入ることもできた。また、同じ母性看護実習でも、実習内容によって違うフロアで実習を行う(新生児室、分娩室、オペ室、褥室など)ので、それぞれのフロアを体験することができた。ただ病院の見学をするのではなく、実習に参加し、病院スタッフとも仲良くなれ、有意義な研修だった。学生の受け入れもよく、日本・沖縄の看護事情について聞いてきたり、日本語の看護専門用語を覚えたり、学生との交流もでき楽しかった。ハワイ大学の教員は、講義と実習、学生の提出



物の添削・指導、職員としての活動など、多忙な毎日だったが、学生に質の良い教育を提供するために努力している姿が印象的で、プロフェッショナルな教育・指導能力、臨床能力の高さを感じさせられた。このFD研修は、専門的教育技術を発展するために、社会の変化に即した最新の情報を獲得し、常に自己研鑽の姿勢を持たなければならないことを再認識した良い機会だった。

今回、このような研修の機会を与えてくださった本大学とハワイ大学看護学部の皆様、ならびにハワイ大学との連絡調整にご尽力くださった比嘉良充先生に心から感謝いたします。



## シリーズ 教育・研究分野の紹介

## 障がいのある子どもの身体運動と社会発達

学校保健 講師 永浜 明子



私の担当する科目は、将来、養護教諭を目指す、あるいは学校保健に関心のある学生が主に受講している。目まぐるしく変化する学校現場で養護教諭に期待される役割は年々大きくなっている。授業では現在の学校の状況、生徒が抱える心身の問題とその対応などをタイムリーに学んでもらえるよう心がけている。

学校の中で養護教諭に期待される役割が大きくなっている理由の一つに、2002年の学校教育法施行令の一部改正が挙げられる。障がいの程度に関する基準緩和や就学手続き改正などを主とするこの一部改正に伴い、これまで養護学校など特殊教育諸学校の入学対象者だった障がいや疾病のある児童生徒が地域の学校へ通う数は今後増加していくと思われる。

このような教育現場の流れに呼応するかのようには、「障がいのある子もない子も一緒に勉強したり、働いたり、地域で生活することも当たり前なのに・・・？」と口にする学生が私を訪ねてくるが多くなった（教育の流れに呼応するというよりも、学生が抱くのと同じ疑問の声の大きさが施行令の改正に繋がったのであろう）。特に、沖縄県の離島や他府県の小さな町で幼少期を過ごした学生が「オカシイナ??」と感じる気持ちが強いように思われる。ちょうど、大阪の小さな町で小・中学校時代を過ごした私が感じた「オカシイナ??」と同じである。その疑問が、私の研究の出発点かもしれない。

20年以上も前、私は母の勤務する中学校の

プール解放に便乗していた。そこには、重い障がいのある生徒がみんなと楽しそうに遊んでいる姿があり、私もすぐに仲良くなった。こういう経験に加え、「理系?文系?」と決め手になる得意教科のなかった私は、「将来、知識として持っていて損はない」との軽い気持ちで、大学を教育学部・障がい児教育に選んだ。大学では、障がい児・者について多くの知識を学び、実践も経験したが、「つまらないな・・・」と思うことが多くなった。授業にもゼミにも出なくなり家と部活の往復だけをする生活が続いていたある日、障がいのある子どもたちが大学のプールにやって来た。私たちは誰からとなく一緒に遊び始め、いつの間にかごく自然に、引き込まれるように子どもたちと遊ぶ自分を発見! 麻痺で自由の利かない体を一生懸命に動かしボールを取りに行く姿。普段絶対に着替えをしないという子どもがさっさと水着になる姿。共通しているのは、「楽しそう」なことだった。私の中の霧がすっきりと晴れた。大学に入って以来、子どもたちの姿がこんなにのびのびと楽しく見えた記憶がなかった。楽しそうでない子どもたちを見て、いつの間にか私自身が子どもたちとの交わりにも楽しさを見出せなくなっていたのかもしれない。この時から、私の「楽しさ」への固執が始まり、以来、「楽しい」が子どもの社会性の発達を促すと信じて、体を動かす楽しみを中心に、「楽しみと発達」をテーマに研究を行っている。

**教 員 紹 介**

(よこがわ)

**保健医療情報**

助教授 金城 芳秀

あなたは、保健医療情報がどのような領域か想像できますか。例えば、私の健康状態は私自身の資源といえます。この資源を私が浪費することは社会的損失の一部となります(これは少々おおげさです、ははは)。もし沖縄県民の一人ひとりが健康状態を大切に、その活力を何かに役立てることができれば沖縄は幸福な人々に溢れることになるでしょう。なるほど、保健医療情報は人々の幸福を扱う領域といえそうです。

もう一度、狭義に言い直してみます。保健医療情報は情報科学、コンピュータ科学および保健学を統合する専門領域です。そこでは、医療サービスの受け手(住民側、病気の有無を問わない)と担い手(医療専門職者側)がさまざまな状況の中での的確に意思決定を行えるよう、データ、情報および知識の統合が促されています。ここでは、われわれが意思決定を行う際に曖昧な部分を減らすものを情報と考えています。

ところで、現実世界では自信を持って行動できることはそう多くはありません。不確実な部分が大きければ大きいほど不安になり、どうしていいか迷います。実は、保健・医療の世界も同じで、自信を持ってやっていることばかりではないのです。このことが現場の専門職者のジレンマにもなっています。われわれ一人ひとりが当事者として問題を捉え、解決志向で行動する必

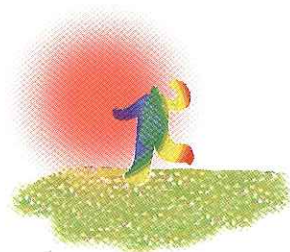
要性が生じてきます。当事者意識を育てるには、コミュニケーションを深める場と機会が不可欠です。これこそ健全な地域社会で求められる情報処理の一つでしょうか。

さらに医療専門職者は、それぞれの専門分野の科学的な知見を更新し、日々の実践に活用することを期待されています。実際、インターネット上には誰でも無料で検索できるデータベースがあります。昨今のITの向上とインターネットの普及により、いつでもどこでも誰でも必要な情報を入手することが可能になってきました。同時に、情報を吟味する論理的で科学的な思考(批判的思考)が重要かつ必要になっています。批判的思考に基づいて問題を解決する専門職者は、健康問題を抱えている人々にとっては貴重な“資源”となります。このような人的資源を育成することが大学の教育目的の一つであり、大学卒業後も継続されるべきです。



このためにも、遠隔教育(テレコミュニケーションを用いた学習)が必要です。本学でも、ソフトウェア、ハードウェアの両面から基盤整備を進めていますので、離島・へき地で医療・保健・看護に従事する専門職者の支援、地域住民への直接的な情報提供を行うことができると考えています。このように対面によるコミュニケーションから遠隔によるコミュニケーションの展開まで、保健医療情報学の守備範囲は拡大しています。

私は、健康は資源であるという立場から保健医療情報を捉え、人々の健康の維持・増進や病気の回復に貢献し、人々の幸福に寄与することを目指しています。



◆ ◆ ◆ 委 員 会 活 動 ◆ ◆ ◆

教務委員会 kishi Keiko Imai

教務委員会の主な活動は、教育課程、科目の履修、単位の認定、シラバス、学生便覧に関する事、および入学、休学、復学、退学、除籍等、教務に関する事項の調査、審議を行うことが中心となります。

平成17年度においては、従来の活動に加え、これまでの運営上のいくつかの課題の改善に向け、現在、1) 既修得単位に関する運営要領等の作成に関する事。2) 助産師コース学生選抜要領の明確化および学生便覧への掲載に関する事。3) 新旧カリキュラムの単位互換の運営要領作成について。4) 1年間の詳細な時間割(日時および講義回数を確認可)の作成およびシラバスへの掲載について。5) 補講に関する申し合わせ事項の作成および補

講期間に関する事。それぞれについて活動計画を立て、審議およびその実施作業を行っているところです。

私が属している委員会は大学院をまぜると10ほどありますが一番エネルギーがいるのは教務委員会で、カリキュラムをはじめ、学部レベルの教育のすべての問題、管理、運営、方針の問題とかかかっています。それで私の体験した日本と米国の大学での看護における、臨床サービス、教育、研究を基に、沖縄の文化と歴史のなかで沖縄県民のためのよい看護をどう築いていくかを毎日考え、沖縄の文化を学びながら汗をかきながら仕事にはげんでいます。私の気持ちは次のEmily Dickensonの詩(Morning)のようです。



Will there really be a morning?  
Is there such a thing as day?  
Could I see it from the mountains  
If I were as tall as they?  
Has it feet like water-lilies?  
Has it feathers like a bird?  
Is it brought from famous countries  
Of which I have never heard?  
Oh, some scholar! Oh, some sailor!  
Oh! Some wise man from the skies!  
Please to tell a little pilgrim  
Where the place called morning lies!

**国際学会発表**

**23rd Quadrennial Congress 2005 in Taiwanへ参加して**

成人保健看護 助手 山口 智 美  
(元国際保健看護)

Nursing on the Move: Knowledge, Innovation and Vitality (歩みつづける看護: 知識・革新・みなぎる力)を旗印に、5月21日から6日間、世界中の看護職者がお隣の台湾(台北)に集った。看護職者にとってはオリンピック的存在であるICN (International Council of Nurses) 大会は、今年で23回目。その盛大な職能的且つ学術的大会は、南祐子前日本看護協会会長の新ICN会長就任決定という、日本人として単純に喜ばしい事項を盛り込んで開催された。

参加者3000人以上という開会式にはじまり、600件余りのポスターセッション、1000件以上の発表、40以上のワークショップや特別講演がプログラムされていたといえば、その盛大さが伝わるだろうか。ワークショップの中で特に興味深かったのは災害時看護のグループ討論だった。マレーシアの医師、香港、英国、台湾、シンガポール、日本、アメリカ合衆国、フィジーからの看護職者で構成された私のグループは他のグループ同様、ユニークな災害時看護計画を立案した。



本学からは吉川教授、コックス助教授と私の3人が発表の機会を得た。聴衆の興味に訴える発表や、盛んなディスカッションが展開されている状況を体験し、刺激となったことは確かであ



る。また、英語を母国語としない発表者たちが、世界の様々な地域から訪れ、挑戦している姿に感心し、陰ながら応援せずにはいられなかった。時折、着物を着た日本人参加者や民族衣装をまとった人々と会場ですれ違った。誰もが英語で話し、靴を履き、スーツ姿という一種の画一的景観が味気なく思えた瞬間でもあった。海外に出ると、自国や自民族文化を意識させられてしまう。「和食・すし」という看板を見かけると、「本物の和食であるはずがない」と妙に疑い深くなる。そこで、郷に入っては、と滞在中は台湾食に徹した。世界一の高さを誇るタイペイ101ジャンワントイビルの洗練されたレストランをあえて避け、台湾人友人に伴われて屋台で虫可仔麵線(牡蠣入り麵)や臭豆腐(豆腐を発酵させてから塩漬けにしたもの)に挑戦した。期間中は台湾市内のいたるところでICN大会の広告が目に入ってきたが、台湾市内にいた看護職者(国籍問わず)の全体数はどのくらいだったのだろうか。4年後の大会の前に2年後横浜で国際学会が開催される。着物や流装での発表というのはどうだろうか。

写真:

[http://icn.ch/congress2005/presentations/23rdCongress\\_files/frame.htm](http://icn.ch/congress2005/presentations/23rdCongress_files/frame.htm)

大学行事

看大祭

看大祭実行委員長 奥間 美香



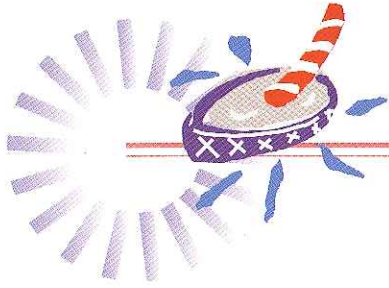
2005年の6月4、5日に「きっかけは～～看大祭!」というテーマのもと、第7回看大祭が開催されました。今年は、スポンサーを募るという新しい試みを行い、例年より看護系出展を増やした看大祭となりました。台風の影響もあり、開催も困難かと思われましたが、1700名という、多くの方に来場していただき、盛大に行うことができました。

2005年の看大祭の見所はやはり看護系出展です。例年の出展に加え、骨密度の計測や減塩味噌汁の試飲、糖尿病食のキーマカレーの試食などが行われました。また、例年から行われている、基礎看護、妊婦体験、性教育、車椅子体験、老人体験、アルコールパッチ、応急救護なども多くの方に来ていただきました。看護系出展はすべてが体験できるようになっています。実際に体験してもらうことにより、私たち学生だけでなく、来場者の方々にも共に健康について考えることができ、看護についてより興味をもつことができます。

しかし、来場者の方々と共にいうこ





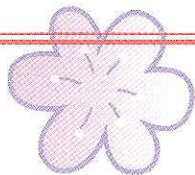


とは、より正確な情報が必要となります。そこで、各出展ごとに勉強会の実施が必要となり、私たち学生自身にとっても、よい学びの機会となりました。また、展示物の工夫、安全面の配慮など、看大祭運営の為の様々な活動を行ってまいりました。その結果、来場者の皆様にも十分に楽しんでいただけたと思っています。また、今年度は例年以上の出店が行われました。

様々な飲食系出店が行われ、もう一つの見所にもなったと思っております。各出店、様々な特徴がみられ、大変、楽しいものになっていたのではないのでしょうか。

しかし、これらの活動も私たち実行委員の力のみでは到底不可能であり、皆さんの御協力があったからこそ盛大に行うことが出来たと思います。

最後になりましたが、第7回看護大学祭に協力していただいた方、ご協力まことにありがとうございました。



サークル活動

えいけんサークル 玉城久枝



はじめまして！今日はこの場をかりて、私たちのサークルを紹介したいと思います。えいけんとは英語検定ではなく、『えい』は、栄養・映画・英語を意味して、主に調理実習や映画鑑賞、英会話を行うことを目的とし、活動しています。私たちが一年次のとき四年次の先輩が主体で、金城芳秀先生と山口智美先生が顧問となり発足しました。今は三年次が12名、二年次が1名、一年次が4名で活動しています。活動の内容としては、季節の食材を使い、栄養・健康を考慮したメニューを考え調理実習を行うことが主です。その際に前期まで在任されていた国際保健看護のコックス先生を招いて英会話を楽しんだり、看護や医療に関する映画を字幕なしで鑑賞するなどして、英語に触れる機会をもっています。また、日頃の活動をもとに看大祭ではパスタやお好み焼きを出店してきました。活動は実習期間を除き、ゆとりがあるときに限られているので頻繁には行えません。そのため一回一回を大事にするよう心がけています。最近では、小龍包を生地からこねて作ったり、沖縄そばをだしから取っ

て調理しました。毎回、何をどのようにして作るかみんなでアイデアを出し合いながら作っています。また、サークルのメンバーの半数が実家を離れて一人暮らしをしています。一人の食事だと栄養が偏ったり気持ち的にもさびしくなりがちです。しかし、サークルでの調理を通して、大勢で手間をかけて作る楽しさ、みんなで会話をしながらおいしい食事をする楽しさを再認識することができました。これからは、一、二年次の後輩たちにメンバーを募って活動を引き継いでいきたいと思っています。興味を持たれた方は一度参加してみてください。作る、みる、話す楽しみを味わいましょう！



教職員の動き



教務部長兼  
成人・老年保健看護 教授  
kishi Keiko Imai

私が沖縄県立大学に赴任したのは今年の春で、福井県立大学の同僚から、“南国沖縄でいいね”、と羨ましがられて見送られてきました。ところが那覇は4月というのに寒くてひどい風邪をひきました。エスキモーのように厚着をして、まだ寒がっていました。つゆの時期になると暑くて汗がながれっぱなしです。室内では冷房装置がよくきいて風邪をひき、望ましい健康状態をたもつのが大変です。

というわけで看護において健康上の問題解決には環境の影響に対する対策が如何に重要であるかということ、また日常生活、仕事上における健康上のケアの重要性を再認識しているということです。

私は教務部長として学部に関する仕事が多おいのですが、大学院に関しても教育に関わっています。大学院生の論文指導、成人・老年保健看護特論、演習などを行っています。私の部長としての役割は大学教育の成果、発展にむけて沖縄県立看護大学の教育目標を実行していくために一つずつ基盤をつくりあげていくことです。そして沖縄県が必要としている看護サービスにおける臨床家の育成、および修士レベルでは看護指導者を沖縄県で育成することが重要であると考えています。



母子保健看護 教授  
前田 和子

平成17年4月に母子保健看護学領域の教授として、茨城県立医療大学から本学に赴任いたしました。主として大学院教育を担当していますが、「小児保健看護方法」「卒業論文」「原著講読」で学部学生の皆さんとも一緒に学ぶ機会を与えられております。

沖縄の気候は、私の故郷・鹿児島によく似ておりますので、私にとって茨城よりもはるかに暮らしやすく、この半年でずいぶん健康的になりました。また、蘭、ハイビスカス、ブーゲンビリア、デイゴ、ホウオウボクといつも花々が咲き乱れ、毎日元気づけられています。今の時点でいちばんお気に入りの花は、はじめて見た、まるで桜並木のような景観を醸し出している「トックリキワタ」の花です。

本学の学生、そして教職員、地域の看護専門職の方々と親しくなるにつれ、沖縄の人々のおおらかさ、明るさ、大胆さ、自由さ、想像力の豊かさに大いに触発されています。皆さんとともに、沖縄県立看護大学・大学院の発展と、沖縄県民のために保健・医療・看護の向上に貢献していきたいと思っています。よろしく願いいたします。

## 教職員 の 動き

### ●平成16年度

◎就任 教授 コックス キャサリン 助手 前盛 壽美 助手 新垣 康子  
 助手 小林 恵子 助手 渡辺 昌子

◎定年退職 主査 具志堅 道子

◎退職 教授 小林 臻 助手 鈴木 香代子

### ●平成17年度

◎就任 教授兼教務部長 キシ ケイコ イマイ 教授 前田 和子 教授 池田 明子

◎転入 学務課長 大山 基 主査 下地 ヒロ子 主任 名嘉山 由美子  
 主事 我那覇 暁典 主事 小笹 いづみ

◎退職 助教授 コックス キャサリン 助手 小林 恵子 教授 吉川 千恵子  
 助教授 岡村 純 事務局長 赤嶺 盛男

◎転出 総務係長 山城 正 主任 外間 喜哉 主任 津波古 優子  
 主事 當山 由香子

### 編集後記

『かせかけ』の発行が遅れてしまい、大変申し訳なく思っています。本学は、今年8年目を迎えます。これまで紡いできた研究・教育等を評価しながら、次のステップに向け歩み出す大事な年になりそうです。皆様の一層のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

広報・情報委員会

## 沖縄県立看護大学

〒902-0076

沖縄県那覇市与儀1丁目24番1号  
 TEL(098)833-8800(代表) FAX(098)833-5133  
<http://www.okinawa-nurs.ac.jp>